【個人研究】

# 大学の授業改善に関する試論(2)

太田　和敬*

## How can lecturers improve their lectures? 2

Kazuyuki OTA

Few academicians thought that they would live to see the day when all students wanting to enter a university could do so, but that day has finally come. Universities' future survival depends on whether or not they can improve their classes and satisfy their students. To that end, we should analyze and share information on lectures with each other.
This essay discusses my efforts over twenty years to improve my classes in order to enrich and encourage student's academic abilities.
1. In order to let students prepare for lessons, I first made handouts and put them in mailboxes. I expected them read before lessons, but many students failed to remove and read them before class. Then I made textbooks, and now I put them on my web site.
2. Students want two-way communication even in big classes. That said, Japanese are often too shy to speak before an audience so some techniques were devised to encourage speaking like giving points for speeches.
3. Students should write down material in class, and I gave them opportunities to do so in reports, mailing lists, and bulletin boards. Reading what other students have written helps to provide different views.
I have used a web-based system to improve my classes.

Key words: 大学改革　授業　Web 2.0　学生指導

## 1　はじめに

この試論は、昨年度『人間科学部紀要』に掲載された「大学の授業改善に関する試論」の続編である。「大学の授業改善に関する試論」では、大学の授業を改善するためには、優れた授業を参考にして、自らの授業を省みながら、優れた授業の取り入れ可能な部分を自分なりに消化し、各教員が授業改善の試みをしていくことが必要であるという観点から、丹治哲雄、秋山邦久両先生の授業を分析した。「優れた授業」といっても、丹治、秋山両氏の授業は、全く性格の異なるものであり、決して「優れた授業」が一様のものではないことも示した。

本論文では、私自身の授業改善の歩みを紹介しながら、授業改善をするにあたって何が必要かを考察するものである。なおここで大学の授業とは、比較的大人数の「講義」を前提にしている。演習や実験・実習ではまったく異なる方法が必要であることは言うまでもない。

大学に限らず、授業の効果を高めるためには、

* おおた　かずゆき　文教大学人間科学部臨床心理学科

教師が十分な準備をすることはもちろんのこと、学生にも授業前後の作業、および授業における主体的・積極的な姿勢を喚起する工夫が必要である。そして、求められる作業とは、以下の４つの領域がある。

１、授業全般を通じて学生に課す課題。
２、事前に必要な文献等を読んでくる予習。
３、授業に主体的に参加させること。
４、授業後、理解したことを復習し整理すること。

高校までの授業と異なって、大学の大教室の講義では、これらを実現することはそれほど容易ではない。高校以下の授業では、教科書、資料集、問題集などを生徒全員が同じものを持っているので、教科書や資料集を予め読んでくること、復習として問題集の中の問題を解くことなどを課すことが可能である。少なくともその条件が整っている。もちろん、それを確実に実行させるためには、様々な工夫が必要であるが、大学では教科書を指定している場合であっても、高校以下の資料集や問題集にあたるものははほとんどないし、また、大学の講義では教科書以外にもたくさんの文献を読ませる必要があるが、それを学生個々人がもっていることは通常考えられない。その文献が図書館に人数分整備されていることもない。たくさんの指定文献を全員に買わせることは非現実的であろう。従って、大学で予習復習を確実にさせる手段そのものが欠けているのである。この難条件をクリアできなければ、大学での講義の教育効果を格段に高めることは難しい。

講義における学生の主体的姿勢をたもつにはどうしたらよいのだろうか。日本の伝統的な大学の講義は、教授が一方的に話し、学生はひたすら筆記するという「伝達型」の方法をとってきた。しかし、最近の学生はそうした方法にあまり満足せず、また、ノートのとり方も高校までの「板書を写す」という域を出ない学生が少なくないために、講義の内容が正確に伝わっていないことすらある。講義の内容を正確に伝える工夫としてプリントを用意したり、パワーポイントを使用するなど、多様に行なわれているが、それぞれの長短等、また条件を活かす要素など、検討の余地は少なくないと思われる。

事後の学習もこれらに劣らず重要である。もちろん、試験やレポートがその大きな要素を示しているが、一回一回の講義の復習を十分にさせることも必要であろう。しかし、大人数の講義では試験やレポートの採点だけでかなりの重労働であり、毎回の授業の復習的課題を出し、それをチェックするのは、多大な労力を必要とする。

本試論は、この難条件をどのようにクリアしようとしたか、私自身の試みの紹介である。もちろん、その方法はいろいろあるだろうが、私の方法は他の人にも容易に実行できるもので、紹介する意味が十分にあると考える。

それぞれの課題別に整理するために、私がここで主に対象としている大人数の講義は以下の通りである。

私が文教大学に赴任して、最初に担当した大人数の講義は教職のための「教育原理」であった。現在、人間科学部の学生のための教育原理は、小学校と中高社会用で異なる講義を用意しているが、当時は一緒であった。履修人数は、大体１００名程度で、資格のための必修であったために、かなり重い負担を課すことができた。

教育原理が終わり、新たに「生涯教育概論」を担当することになった。私が赴任したときには、「教育学専修」という名称のコースであったが、次第に希望者が少なくなり、改革の一環として、名称変更をしたのである。

当時の人間科学部は人間科学科の単学科であり、４つの専修がそれぞれ学部必修の概論を出し、更に社会福祉概論の５つの概論構成だった。教育学専修は「人間形成概論」という講義を持っていたのだが、専修名称変更とともに、「生涯教育概論」となり、担当者が野島正也、本田時雄両先生の分担から、私一人の担当に移管された。ちょうど、教育原理の担当が終わったときと重なったので、教育原理で行っていたことを、より大規模に行うようになった。

その後臨床心理学科ができ、それと同時に、文教大学全体がセメスター制に移行することになった。そして、生涯教育概論は、教育学概論と生涯学習概論のふたつに分割され、私は教育学概論の担当者となり、半期だけを受け持つことになった。この変更と同時に、「概論」は必修から選択必修となった。セメスター制と非必修化のため、授業のや

り方を大きく変更せざるをえなくなった。

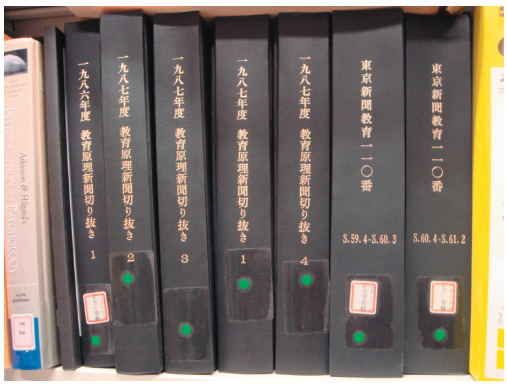
近年、大学の冬の時代の影響で、大学教育改善の努力は多くの大学でなされており、書籍や学会報告も増大している。本試論はそれらを無視するわけではないが、自分の取り組みに特化して紹介する。

## 2　日常的課題

### 2－1　教育原理　新聞の切り抜き

文教大学の赴任は、また、大学教師としての最初の常勤の教員でもあり、その前に非常勤の経験があるとはいえ、まだまだ大学の授業について理解が浅かったために、かなり手さぐりなところがあり、また、教科書などを用意することはできなかった。

この授業は、教師になるための必修授業であり、かつ通年であったために、日常的な課題を課すことが可能だった。そこで課したのが、新聞の切り抜きであった。一年間切り抜きを実行し、成績用に年度末に提出させた。写真はきちんとした切り抜きをした学生のものを製本したものである。もちろん大部分は返却したが、こうして残しておくものは、その後も時折学生に見せて、参考にさせている。




新聞の切り抜き

切り抜きをさせる意図は、主に教育をめぐる社会的状況を把握させるためであるが、自分の問題意識にそって切り抜きをする学生もいるから、問題意識を育てる点でも、有効であった。

ただ、一人暮らしをしている学生はほとんど新聞をとっておらず、ぎりぎりの生活をしている学生たちに新聞を講読するように強制はできないので、図書館で読むように指示したが、現在ではインターネットでほとんどの新聞を読むことができるので、インターネット時代に即応した新聞のデータ化を課題として課すことは、有効かも知れない。（ただ全員必修の授業ではなく、特別な領域を前提とした授業で有効であろう。）

### 2－2　生涯教育概論　自伝とビルドゥングス・ロマンの読破

生涯教育概論という講義をどのように構成するかを考えたとき、人間の一生の発達や教育を考察するのだから、自分の一生を振り返ること、そして、一生を描いた長編小説を読破することを、日常的な課題と決めた。前者は、「自伝」を書くこと、そして、後者は、ビルドゥングス・ロマンを読み、レポートを書くこととして具体化した。

自伝といっても、まだ18歳であるから、半生の記であるが、特に、幼少の記憶は定かでないので、親との対話を促すという意味もこめ、また、学校時代にあったことを対象化するという意味で書かせ、分量を最低レポート用紙20枚とした。これは原稿用紙に換算すると、80枚程度になり、ほとんどの学生がそれまでに書いたこともない大作であるから、最初は戸惑いの表情をみせるが、書き始めると、レポート用紙40枚程度書く者も毎年数名おり、ほとんどの学生は、書いてよかったと記していた。

ビルドゥングス・ロマンにしても、あまり長い小説や古典を読まない近年の学生からすると、大変な作業になるが、残されているビルドゥングス・ロ

マンは古今の傑作ばかりであるから、長編を読了したことで、山を超えたという充実した感情を残していた。

自伝については、毎年、当初何人かの学生からの「抵抗」があった。多くは「長すぎる」という声であったが、それはやがて、書き始めると消えていった。しかし、困難だったのは、プライバシーの問題に関することだった。個人情報保護法がある現在なら、この問題はもっとシビアであろう。まず、決して他の人には見せないことを約束し、書いてもいいと判断することだけ書けばよい、という趣旨を徹底した。しかし、実際にはかなり個人的な事柄を書いてくる学生が多く、こちらが戸惑った程である。

しかし、こうした宿題を課すことが可能であったのは、夏休みという長期休暇があり、また、必修であったことが大きい。現在は夏休みそのものが短くなっているが、当時は実質的に２カ月以上は夏休みであったから、その間にかなりハードな課題を課すことが可能だったのである。現在、大学はセメスター制をとっているので、すべての授業が半期で終了する。従ってこうした負担は重いが効果は大きい課題を出すことが難しくなっている。

セメスター制と通年制とは一長一短あると考えられるが、セメスター制は教育効果から見れば、負の要素の方が大きいように思われる。演習科目は、その後もⅠとⅡを連続させることで、事実上の通年制を維持しているが、講義は完全に半期、つまり、せいぜい４カ月なので、できることに限りがある。

## ３　予習―テキスト作成

### ３－１　生涯教育概論　プリントの事前配布

生涯教育概論からは、できるだけ予習することを重視することにした。しかし、予習をさせるためには、その材料がなければならない。通常は、まず第一に教科書だろう。だが、この時点で教科書は指定していないし、また、他人の書いた本を教科書に指定する気持ちはなかった。

近年の出版不況のためもあるが、教科書出版は堅実な売り上げが見込めるために、かなり容易に出版ができる分野となっている。しかし、売り上げを増すために、できるだけ多くの執筆者を集める必要があり、勢い各執筆者が書く部分は少なくなる。一般的に他人の書いた部分を自分の講義のテキストにはしにくいから、結局、自分の書いた部分のみを使用する形が少なくない。しかし、これは学生にとって極めて迷惑なことだ。すべて使用するなら購入も厭わないが、ごく一部しか使用しないなら購入しない学生がいても責めることはできないだろう。高い教科書を買わされたのに、ほとんど使用しなかったというのは、多くの学生から寄せられる不満である。

このようなことをしないために、プリントを印刷して配布する教師もたくさんいる。私も、当初自分で文章を書いたプリント方式を採用していた。もっとも、いきなり教科書にできるほど、執筆が進んでいなかったので、数年間は、少しずつ内容を改訂しながら配布してきた面もある。しかし、これはあくまでも「予習」のためという意識であったので、事前に配布する必要がある。当日配布では予習にならない。そのために、研究室の前にレターケースを設置し、私はプリントをそこに３～４日前にいれ、学生は事前に取りにきて、読んでから授業に出るという約束である。

もちろん、そういう約束をまもって、きちんと予習してきた学生もいたが、残念ながらそれは少数派だった。多くの学生は、ただ取るだけは取るが、全く読まずに来る。当日の朝プリントを取って、授業に駆け付ける学生も少なくなかった。事前配布方式はうまく機能しなかったわけである。やはり授業開始時に全員が教科書として持つことの必要性を感じた。

### ３－２　教育学概論　教科書の自作

臨床心理学科ができ、文教大学全体がセメスター制に移行することになった。そして、前述したように生涯教育概論は、教育学概論と生涯学習概論のふたつに分割され、必修の５つの概論が選択必修の８つの概論になり、私は教育学概論の担当者ととなり、半期だけを受け持つことになった。

生涯教育概論のときのプリント方式の不十分性の反省から、教科書らしい形のものを作成することにした。

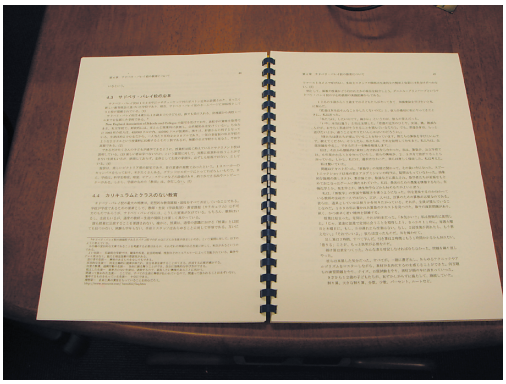
民法学の我妻栄教授は、大学教師の最も基本的

な仕事は、研究論文を書くことと、教科書を作成することであると、どこかに書いていたのが、ずっと心に残っていた。このふたつができない者は大学教師の資格がないということである。大学と高校までの教育で最も大きな相違は、高校以下では教育課程が文部科学省の作成する「学習指導要領」によって大筋が規定されているのに対して、大学の教育内容は、実際に教える教員に任されていることである。もちろん、学問の性格上、また、資格付与の要請から、教育内容が規制される面があるが、大学の提供する専門科目については、基本的に「教授の自由」が憲法によっても保障されている。しかし、それは、教員が完全に教育内容についての責任をもつ必要があることを意味し、教科書を一人で執筆できない程度の学問水準では大学教師としての水準に達していないということを意味するというのが、我妻教授の見解であろう。実際に教科書を自分で執筆するかどうかは別として、「書ける」ことは大学教師の必須の条件であるように思われる。

大学の講義では必ずしも教科書を使用するわけではないが、やはり、講義にきちんと沿った教科書があるのが望ましい。しかし、大学生は教科書に対して、かなり共通の不満がある。それは、値段が高いことと、実際には極めて稀にしか使用されず、ほとんどは授業で全く触れないという点である。やはり授業者がすべてを執筆する教科書が望ましいのである。

そこで、完全に授業の内容に沿った安価な教科書を自分で作成することにした。まず値段もできたら300円程度にしたいと考えた。無料ということも不可能ではないが、無料であると、学生にとってあまり重みがなく、これが教科書であり、しっかりと予習しなければならないという気があまり起きないような気がしたのである。むしろ、安い金額なら、買ってもらった方がしっかり利用しようという気持ちになるのではないかと考えた。そして、教科書が授業の内容を正確に表しているようにする。もちろん、これは長い間授業のためのプリントを作成してきたから、問題はなかった。

問題は製本である。教科書はそのまま机において安定する製本であることも重要な条件であると思う。自作すると、製本も自分でしなければならないが、通常安く入手できる製本機は、背から１センチ程度の部分を綴じる形のものがほとんどで、机に安定的に開けるものではない。いろいろと調べると、欧米で通常使われている20程度の四角の穴を開け、堅いビニール製の輪で閉じ込める形式の製本機が10万円程度で売っていることがわかり、それを使用することにした。そして、コピー用紙として最も厚い紙で印刷すれば、かなり「本」らしくなることがわかった。更に、見栄えのよい印刷を実現するために、組版ソフトのＴｅＸを使用することにした。ＴｅＸを使用している教員が、まったく越谷にはいなかったので、使い方に慣れるまでにかなり苦労したが、原稿を入試期間を利用して書き上げ、春休みに学生アルバイトを雇って、印刷製本をした。



そして、すべての講義科目の教科書を作ったのである。値段を400円に設定したこともあって、学生には概ね好評だったと思う。このやり方は４年程度継続実施した。

この形で教科書を作成することのメリットは何だろうか。

まず学生に講義の概略を正確に知らせることができ、また、各回の講義の内容を予め予習させることができるという点である。学生がどれだけ予習を実行していたかは、心もとないが、少なくともそれを求めることができる。

また、自分で教科書を執筆することで、講義内容を事前にしっかり構成できることである。そして、出版社からの出版物ではなく、自家製であるために、毎年改訂できる点である。もっとも、私は今８種類の講義をもっているので、８種類の教科書を作成しており、それを毎年改訂することは、近年休み期

間がどんどん短くなっていることもあり、不可能であるが、できるだけ改訂しようと思って努力している。

次に値段が極めて安いので、必ず学生が購入することである。実際のところ、2000円、3000円する教科書は、教師が指定しても、履修学生がみな購入するわけではない。まったく買わない者もいる。それでは教科書として指定している意味がなく、授業効率は上がらない。

しかし、この方式はやはり大きな欠点もあった。それは、あまりに手間がかかり過ぎるという点である。業者に依頼しても、より簡単な製本であれば、500円での販売が可能であるが、やはり、机における形の製本で依頼することはできないので、業者に依頼することは考えなかった。そこで、海外研修で一年間授業を離れることをきっかけとして、帰国後まったく別の方法を導入することにした。それは、ＰＤＦのファイルをホームページにおいて、学生各人がダウンロードする方法である。もちろん、プリントアウトしたい者はそれも可能であるが、強制はしなかった。ダウンロードして、パソコンの中に取り込み、そこで読むのも可とした。授業で教科書を朗読したりするような使い方はほとんどしないし、事前に読んだことを前提に討論を組織するような授業をするのだから、当日教科書をもってくる必要はないとしたので、学生にとっての費用は、印刷しなければ無料の教科書ということになった。

もうひとつの欠点は、出版社に発行してもらう場合には、専門の校正係が校正をして、間違いをチェックしてくれるが、自作の場合には自分で校正するしかない。しかし、大量の教科書を作成するために、校正漏れが多数生じる。何度か学生から不満がでた。特に、ダウンロード形式になってから、作成する教科書の数も多くなったせいもあり、不満が出る機会が多くなった。多いといっても、２年に一人程度であるが、実際に不満を表明する人が一人いれば、多くの学生が同様な感想をもっていると考える必要がある。そうしたときには、学生に無料で配布するためにボランティアとして行なっており、出版社に依頼すればより誤植のない教科書ができるが、その場合には3000円程度の値段になると説明し、納得してもらっている。そして、使用しなくなった掲示板に「間違い訂正」の書き込みができるように設定したが、そこへの書き込みはまだない。

## ４　授業における積極性の喚起

今はほとんどの教師が、授業資料を用意したり、パワーポイントを使った授業を行っていると思われるが、当初の私の教育原理では、そこまではなかなかいかず、自分用の詳細な講義ノートを用意して、話に工夫をする程度であった。

大学の講義は「新しい内容を学ぶ」ものと、「新しい観点から学ぶ」ものとがある。人間科学部のような領域では、新しい内容を学ぶよりは、内容は既に高校までの教育である程度学んでいるが、新しい観点を入れてより深く学び直す性格の濃い科目も少なくない。教育学関連はほとんどがこうした性格をもっているといえる。

さて、この教育学概論で、一番重視したことは、予習をしているという前提であるが、双方向の授業を行なうことであった。学生たちの大学の講義に対する不満の多くが、授業が教授の一方通行の授業で、自分たちの参加ができないという点にある。もっとも、だからといって、実際に発言を促しても、発言する学生は少数であるが、しかし、発言しないにせよ、発言機会を与えることによって学ぶことは多い。

1995年に岡堂哲雄教授から、日本私立大学連盟の発行する『大学時報』に、私の授業紹介の文章を書くように依頼された。私は「大教室での討論の可能性」と題する短文を書いた。その中で、次のように書いている。

「（多様な教育観が存在することを具体的に知り、自分と異なる教育観を吟味することで、しっかりした自分の教育観を形成することを目指していたが）このような形態を実現するためには、一方的な話ではなく、双方向コミュニケーションでなければならない。しかし、250名の大教室での討論など可能であろうか。また、討論といっても、現在の学生は自分の意見を多数の前で発表することに、懐疑的な面をもっている。パフォーマンス世代ではあるが、それゆえに警戒心も強い。そうした心情を超えて討論を実現するためには、討論することが、自己の

認識を深化させているという実感を持たなければならない。（略）なかなか意見が出ないときには、手をあげてもらって、意見分布を確認したりしながら、それぞれの意見の中から、発表者を募ったりする。あるいは、挑発的な、常識に反する考えをわざと紹介したり、以前の学生とのやりとりを紹介する。そうするとしだいに意見が出てくるようだ。」

当時、使用教室にワイヤレスマイクがなかったが、頼んで設置してもらい、学生もマイクで話してもらうことで、全体に聞こえるようになった。こういう点については、我が大学の事務は本当に協力的である。

しかし、残念ながら単に発言を促すだけでは、ほとんどの学生は大教室で発言したりしない。おそらく常時発言がなされる状態を作り出すためには、成績と結びつけることが有効であり、授業テクニックだけで発言を引き出すことは、よほどの技術が必要だと思われる。ハーバード大学では教師が指名し、その返答によって成績をつける授業が少なくないというが、日本の大学でそれをやれば、ほとんどが落第してしまうかも知れない。私は結局「加点」方式をとった。通常のレポートや試験で100点満点の採点をし、発言した学生は１回あたり10点加点するという方法である。

こうしたやり方には、何度か学生からの不満が表明された。何人も手をあげて指されなかった場合は不公平ではないか。気が弱くて手をあげられない人もいる。考えているうちに次の話題に移ってしまうことが多く、なかなか発言できない、等々。それらは確かに合理性のある批判であるが、しかし、何らかの方法を選択すれば、必ず違う不満が出るものであり、加点、つまり発言しなくても基本的課題を果たせば単位はとれる方式であるということで了解してもらい、現在に至るまで続けている。授業中の学生の発言は、異なる意見を具体的に知ることになり、教育効果は非常に大きいと思われる。また、日本社会も、今まではあまり自己主張しないことが好まれたが、今後は自分の意見を的確に表明できる能力が求められるようになっていくと考えられるから、日常的に演習だけではなく、大人数の講義で発言を鍛えることが必要かつ有効となるといえる。

成績に影響するとなると、学生たちはかなり積極的に発言するようになり、手をあげても指されないという不満解消のために、発言できなかった者は、しようと思っていた発言内容をレポート用紙に書いて提出することを認め、それを「文書発言」と称した。そして、この文書発言は、次のプリントの材料とした。つまり、文書発言の傾向を紹介し、発言及び文書発言への返信をするという形である。高校と大学では、様々な面で異なるが、大学では授業における教師とのコミュニケーションが少ないことに不満をもっている。もっとも、学生たち自身が、場を与えられれば、積極的にそれを活用するわけでもないのであるが。

この文書発言がきっかけとなって、「復習」形態をより明確にすることになった。更に一種のコミュニケーションの場ともなったと考えている。

## 5　復習としてのライティング

教育原理では、年に10回程度、レポートを提出させていた。授業は22、3回あるから、２回に一回という頻度となる。このレポートは、年間を通じて優秀な書き込みをした学生のものを、年度末にまとめて製本し、次年度の学生に閲覧させた。もちろん、そうすることを個々の学生たちの了解をえてのことである。

アメリカの大学では、一年生のときに、レポートの書き方などの、非常に実務的かつ基礎的な指導を行うと紹介されている。日本ではこれまでほとんど行われていなかったが、近年の大学の授業改革のなかで、徐々に導入されている。しかし多くの場合、日本の大学では、いきなり大教室の講義、そして、論文形式の試験やレポートが課されるが、通常の学生は、どのようにノートをとっていいのか、あるいはどのようにレポートを書いていいのか、わからないままに自信のないレポートを書き、ノートは乱雑な大学の教師の板書を部分的に写すだけという作業に終始している学生がまだまだいるように思われる。

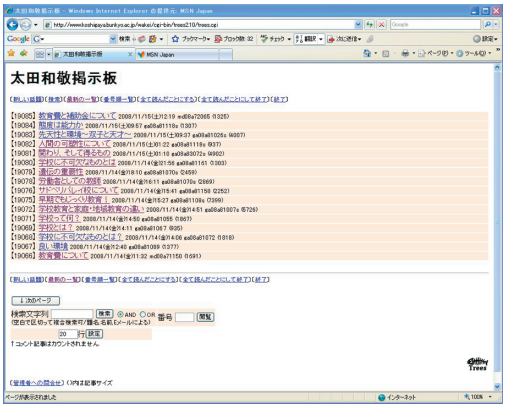
私自身、それを十分に克服しているわけではないが、とりあえず、教育原理の授業では、優秀レ

ポートを閲覧させることで、どのようなレポートを書けばいいのか、先輩たちの模範を示すことで教えようとした。

生涯教育概論になって、文書発言という形になったことは前に述べた。ただ、文書発言の提出ぶりみると、やはり、発言意欲は強くもっていることがわかった。

さて、大学時報の短文の最後に、私は、ＬＡＮが構築されれば、プリント配布をより効率的にできるとインターネット導入を期待する文章で締めくくった。インターネットが文教大学に導入されたのは、その３年後くらいであった。私がこの授業にインターネットを最初に利用したのは、プリント配布ではなかった。文書発言をインターネット利用したのである。つまり、文書発言は、本来授業中の発言であるべきであるが、言いにくいというだけではなく、全員を指名することはできないのだから、どうしても、文書発言で代替する学生が多い。しかし、それは、いくら傾向を紹介しても、文書発言を読むのは、教師である私だけであり、全員が聞くことができる発言とは異なる。つまり、文書発言も教室での発言と同じように、全員が知ることができるようにしたいと考えたのである。それでこそ、多様な意見を知るという、出発点の前提をクリアできるからである。

そこで生涯教育概論のためのメーリングリストを設定し、文書発言はそのメーリングリストへの投稿という形式にしたのである。これによって、多くの学生の意見を全員が知ることを可能にしたのである。当初学生はこれを肯定的に受け入れていたが、すぐに私自身もこのやり方のまずさに気づいた。現在、メールボックスの容量は拡大されているが、当時は、学生に関しては、大学では1000メールという上限を設定していた。しかし、250名いる学生が、毎回の授業で文書発言をメールで送るのだから、すぐにメールボックスが一杯になってしまい、他の個人的なメールを受け付けなくなってしまう。それに、実際上、私は仕事だから読むが、そんなに多数のメールを学生が読めるわけではない。このため、この方式は短期間で止めることなった。そして、考えたのが、掲示板の使用である。




実は、当初から掲示板も考えていたのであるが、掲示板を設置するためには、ＣＧＩの使用が前提で、当初大学のインターネット環境として、ＣＧＩの使用を許可していなかったのである。この点については、情報学部などからも、強い要望が出され、許可されるに至って、適当な掲示板プログラムを探して、掲示板に書き込むように改めた。

掲示板に書き込ませるというのは、いろいろな点で極めて便利であり、効果的であったと思う。従って、今でも採用している方法である。 まず、メーリングリストのように、個々人のメールボックスを占領することがなく、また、読みたいものだけを選択して読めるし、また、スレッド方式でのコメントもつけられる。だから、授業中での討論のようなことを掲示板上で実現できるわけである。

また、掲示板の書き込みはメールのように、紛失してしまう恐れがない。大学だから、サーバー管理はしっかりしているので、今まで事故が起きたことはない。そして、検索機能がついているので、特定の学生の書き込みだけを表示でき、採点上極めて便利である。以後しばらくの間（今でもすべてではないが）掲示板への書き込みを成績評価の手段とするようになった。 更に、掲示板の有効性は、優れた文章を模範として示すことで、どのような文章が高く評価されるのか、どのような文章がよいのか、その理由は何かを、具体例で学生に教えることができる。

## ６　聴覚障害の学生のため

次に大きな授業方法の変革を迫られたのは、聴

覚障害の学生の入学だった。ある年の授業開始の第一日、生涯教育概論の授業が終わった時点で、学生Ｎがやってきて一枚の紙を渡された。そこには自分が聴覚障害の学生であるので、授業で配慮してほしい旨が書かれていた。

私が初めて大学で教えたとき、それは別の私学の非常勤であったが、そこに聴覚障害の学生がいた。二人の学生が授業中絶えず後ろを振り返って、何かやっているので気になっていたが、授業修了後、手話通訳をしていること、ＦＭマイクを使用してほしい旨を伝えられた。だから、手話通訳が役に立つと考えたので、Ｎの話を聞いたあと、すぐに手話サークルの部室にいって、事情を知っているかどうか確認し、援助を求めた。そして、学生課にも相談した。しかし、手話サークルは、今でこそ聴覚障害学生が何人も入学して、彼らに鍛えられたために、手話通訳の腕が上がっているが、当時は実際の手話コミュニケーション経験はなく、とても大学の授業の手話通訳をできるレベルではなかった。

どうしたらよいか、考えた末、思い切って、録音してテープを起こし、それを渡すことにした。もっともそれがスムーズにいったわけではない。最初はノートテークの手配もなかったために、勝手に授業を履修している学生に、ノートテークを頼むという乱暴なやり方になってしまった。そして、３度目くらいの授業から、録音を始め、それを起こして印刷し、ノートテークをしてくれていた学生とＮに渡すことにした。しかし、当時は既に、ホームページを使っていたので、それではもったいないと思い、ホームページに掲載することにしたのである。そして、その後Ｎを含めて３名の聴覚障害の学生に、講義を履修している限り、講義録の完全起こしを掲載してきた。

これは、非常に大きな労力を費やしたが、いろいろな意味で、講義の改善に役に立った。

聴覚障害の学生にとって、講義を完全に近く理解できるというのが、最大の利点であった。ノートテークされた情報に比較して、10倍ほどの情報量がこの講義録にはあると聴覚障害の学生から伝えられた。

それ以外にも、いくつかの利点があった。　まず、自分の講義を録音し、あとで精密に聴くことになるが、声の曖昧さ、話そのものの曖昧さ、説明の不十分な点など、反省するきっかけになった。

第二に、講義で言い忘れた点、表現が不十分であった点を訂正できることである。もちろんそうしたことは、あまり行うべきことではないが、人間である以上、一回性の講義での不十分性は避けられない。そのようなときには学生の理解も不十分に違いないから、訂正する機会があれば、訂正したほうがよい。

第三に、学生の正確な理解を促すことができる点である。学生は講義での授業内容をかなり誤解している面がある。これは掲示板での書き込みでもわかる。しかし、通常はその誤解を正すことができないが、この正確な講義録を読ませることで、誤解を訂正させることができるわけである。もちろん、講義録を読むことは義務にはできないが、意欲的な学生は、講義録があると、掲示板に書くために読む。

これは講義であったが、演習や討論はどうするのだろうか。Ｎについては、そうしたことは経験することがなかったが、別の学生で、討論することがあった。国際社会論という授業で、ディベートをやったときのことである。４名程度のグループをふたつ作り、議論をするのであるが、聴覚障害の学生Ｍが一人参加したのである。討論の場合は、単に「聴く」だけではなく、「話す」ことも課題となる。聴覚障害の人は話すことも通常不自由である。

幸い現在は、コンピューターやネットワークについて、学生は習熟しているので、チャットソフトを使用することにした。

パソコン２台をチャットソフトで接続し、それを

プロジェクターを介してスクリーンに写す。M以外の学生の発言はすべて、私がパソコンで打ちこみ、それがスクリーンに写るので、Mはスクリーンを通して、学生の発言を知る。そして、自分が発言したいときには、自分のパソコンで打ち込み、それがスクリーンに写るので、他の学生がその発言を知る、こういう仕組みである。私は、親指シフトキーボードを使用しており、学生の発言をかなりの程度打ち込むことができるから、この時は私が発言をすべて打ち込んだが、タイピングの速い学生が２人程度いれば、十分に聴覚障害の学生が討論に参加することを保障できると考えられる。

## 7　人間科学大事典の試み

次の新しい要素は、人間科学大事典である。学生の能力を高めるのが、大学教育の役割であるが、その基礎的能力に「説明能力」がある。説明は、あらゆる職業や社会生活において必要なことである。大学院の入試などでも語句説明が出題されることが多い。しかし、授業において説明能力を向上させる試みはほとんどないように思われ、現在の学生は、ある概念やことがらについて、簡潔、明瞭に説明することが苦手な者が多い。掲示板で自分の意見を書くことは、かなり積み重ねてきたが、説明という点では不十分性を感じていた。

現在Webの世界は急速にWeb 2.0という方式を多く取り入れるようになっているが、小学校教師をめざす学生との勉強会で、Wikiのもつ教育的効果を確信できたために、人間科学部全体の教育の質を高め、学生の説明能力を高めるために、Wikiを使った「人間科学大事典」の企画を学部教授会の承認の下に進めている。

現在の学生は授業関連で調べ物をするときにには、まずウィキペディアを調べることが多い。だから、Wikiの世界には慣れており、かなりスムーズに入っていくことができる。しかし、やはり発言や掲示板と同様、授業である以上成績評価との関連が必要で、考えることよりは知識の修得に比重のかかる「国際教育論」と「異文化理解論」「国際社会論」そして教育実習の準備の授業で、レポートの代わりにこの人間科学大事典に自分で項目を設定して書くことを課題としている。私が読んでいる限りは、かなりきちんと調べて書いており、これで説明能力が向上することは十分に期待できると考えている。現在の３年生に課しているが、彼らが教育実習から戻ってきたときに、この時培った説明能力が、実習で授業を行なうときに、どの程度役に立ったかを検証したい。なおソフトウェアとしては、ウィキペディアのソフトであり、フリーソフトであるMediaWiki を使用している。

## 8　残された課題

予習をさせるために教科書を作成しているが、もちろん教科書だけでは不十分である。さまざまな文献を読むことを義務づける必要がある。しかし、現在の大学図書館の実情では履修している全学生分の文献を用意することは不可能である。どうしても読ませる必要がある場合は、必要部分をコピーして配布するだろう。これは、著作権法上も許されている。しかしこれは費用や環境問題上の問題もある。そこで私自身は、必ず読ませる必要がある部分のみをデジタル化し、授業履修学生にのみダウンロード可能なサイトを設定して、読むことを義務づけることを将来の課題として考えている。多くの手間がかかると思われるが、そうして、学生が教科書や必要な文献を事前に読んで講義に主体的に参加し、そして、そのまとめを文章として残すという学習スタイルを積み重ねていくことができれば、教育効果が著しく向上し、大学の評価を高めるものと考えている。